

私は幼い頃から博物館が好きで、訪れる度に何時間も入り浸っていました。一つひとつの展示をじっくり見たくて、説明書きの一字一文字に目を通しながら、長い時間をかけて回りました。幼い私にはどれも難しかったでしょうが、過去の時間に思いを馳せながら展示品を見ることは、ワクワクしてたまりませんでした。私がなかなか次へ進まないの、親には何度怒られたことでしょう。

忘れられない展示があります。

私が小学四年生の頃、家族で蒲郡市にある「生命の海科学館」を訪れた時のことです。入るや否や、現れたのは宙を舞い、一階から二階をつらぬくプレシオサウルスの化石。衝撃を受けました。そしてその圧倒的ビジュアルを前に、会話する父と学芸員さん。学芸員さんは父の質問に対し、本当に嬉しそうに答えてくださいました。淀みなく流れ出る、深い知識。その時代の風景が浮かび、まるで時代を旅しているようでした。ただただ「格好良い」と思いました。同時に、会話に混ざれない悔しさも感じました。そのときから、「博物館が好き」という思いは、学芸員への憧れへと広がっていきました。

私をそこまで博物館に夢中にさせたものは何だったのか。立ち並ぶ展示品の風格はさることながら、それを引き出す学芸員のたゆまぬ努力があったのだと、気づかされる体験でした。

博物館で働く学芸員の仕事は、文化財や資料を調査・保存すること、それらを活用して展示を企画することです。展示品たちはどれも大切に扱われ、適切な温度・湿度のもとで管理されています。また、扱うときには、大切な文化財を傷つけないため、指輪や腕時計などを外さなければいけません。

誰しも、博物館を訪れたことはあると思います。館によって展示品の配置は違いますが、これ考えるのは学芸員です。では、展示品一つひとつに添えられているキャプション（展示品の名前や作者、資料についての説明書き）をじっくり見たことはあるでしょうか。これを書くのも学芸員です。展示品の魅力や見どころが伝わるよう、また、専門知識がない方にも理解してもらえよう、平易な言葉を使い、推敲を重ね工夫を凝らした文章です。

私の夢は、博物館で働く学芸員となり、歴史や文化の魅力を人々に伝えることです。しかし残念ながら、学芸員とは何なのか、一般にはあまり知られていません。私は学芸員として、学芸員という職業についても広報していきたいと思っています。大変なこともあります。とても魅力的な職業です。

八四〇三人。

現在、日本で働く学芸員の数です。

医師の数が約三四万人。弁護士が約四・五万人、公認会計士が約三・六万人。難関国家資格が必要な職業と比べても、学芸員という職業の希少さが分かります。

学芸員になるためにはまず、大学で専門分野や博物館学を学び、資格を取得する必要があります。この資格自体は、年間約一万人が取得していると言われています。ですが、一つの館にいる学芸員は一人や二人の場合がほとんどで、欠員が出たときにしか新規の募集はありません。日本全国、自分の専門分野でない館も含め、粘り強く採用試験を受け続ける必要があります。しかし私はそれを絶対に乗り越え、学芸員になります。そのために大学生のうちからアルバイトできる博物館を探し、現場での経験を積み、学芸員に必要な社交性も身に付けていくつもりです。

博物館には、先人たちの紡いできた時間が流れています。展示品の一つひとつには、先人たちから託された思いが確かにあります。私はそれを人々に伝えたいと思っています。幼い頃覚えたあの感動、いえ、それ以上のものを感じ取ってもらい、必ずや未来に繋げてみせます。